看護師さんへの「お礼の手紙」

新型コロナウイルス感染拡大により、大阪は医療崩壊に直面している。新聞などでも、病院の医師や看護師らの献身的な治療が紹介されている。病院の厳しい現実を考えると、つい5年半前の入院生活のことが思い起こされる。そのときのレポートを一部修正して紹介したい。

（2021年5月8日）

2015年11月20日、名古屋市立大学病院眼科に入院し、24日に「黄斑円孔」の手術をした。もう1ヶ月余りが経つ。無事12月3日に退院して、やっとペースを取り戻しつつある。

先日、退院後の検査・診察があり、網膜黄斑部の孔は順調にふさがっているという。ひとまず安心した。視力の回復には、まだ月時間がかかりそうだが、1日4回2本の目薬の点眼を真面目に行っていきたい。

この点眼は退院後、なかなか継続が難しい。私なりの「点眼管理」として、毎回記録をつけることにしている。こんな「提案」を含め、入院中お世話になった看護師さんに、退院まもなく「お礼の手紙」を送った。参考になればと下記に添付しておきたい

（2015年12月27日）

市大病院10階南病棟「ナースステーション」の皆様へ

私は11月20日から12月3日まで、眼科で1058病室に入院していた患者の山田明です。2週間にわたる入院生活では、皆様に大変お世話になりましたので、お礼を述べたく、手紙を書くことにしました。

24日の手術までは、とにかく心配で、緊張気味に過ごしていました。担当の看護師さんにきめ細かく、本当に温かく対応していただき、手術も無事に終わりました。手術後もなにかと丁寧に看護してもらい、予定通り退院することができました。

長いようで短い2週間の入院生活でした。退院2日後の5日、土曜日午後、名市大滝子キャンパスで「開学65周年記念」関連のシンポジウムがありました。前日の夜に「エアー」もなくなり、なんとか報告をこなすことができました。郡学長も参加され、すこし話すこともできました。鯱城学園「高年大学」にて講義がありますが、これもいつもの調子で講義できそうで、ほっとしています。

これも皆様方のおかげだと感謝しています。

それにしても、看護師さんたちの仕事がいかに「重労働」なのかを、患者の立場からも改めて実感できました。とくに夜間や土・休日などは、少ない人員で多くの仕事を懸命にこなされていることを、ほんの少しですが、理解できました。「よりよい看護のため」には適切な人員配置、勤務形態が欠かせないのではないかと、退院してから思いを新たにしています。同じ大学で長らく働いてきた者として、患者の１人として、これまで以上に市大病院に関心をもとうと考えています。

じつは 2 年ほど前の 2013 年 8 月 12 日から 18 日までの 1 週間、「黄斑上膜」の手術で入院しました。2 度目の入院生活でした。1 回目は夏の猛暑の季節でしたが、今回は晩秋から冬への季節でした。病室や食堂から見える景色も、また違った「味」がありました。2 年前と違ったこととして、「患者参加型看護」という目標がありました。

「看護計画」によりますと、患者が行うこととして、最初に「安静の指示を守る」とあります。辛かったですが、術後のうつ伏せ・うつ向き姿勢など、安静の指示を守ることは早期回復に欠かせないと実感しました。

点眼についても書かれていますが、ひとつ提案があります。担当の看護師さんに話しましたが、2 本の目薬を 1 日 4 回にわたり点眼する際に、私は「記録」を付けていました。看護師さんがチェックされますが、患者が「記録」をつけることも必要なのではないでしょうか。2 本を間違えず、点眼の間隔を 5 分以上あけるうえでも、効果的でした。これはあくまで患者の意思によるものですが。自分で点眼を「記録」することは、退院後の規則的点眼にも役立つと思います。「患者参加型看護」の一環として、私のささやかな提案を検討していただけると嬉しいです。

とり急ぎお礼まで。本当にありがとうございました。なお私のホームページ掲載のレポート「入院日記」を同封しておきます。